

11 月第 1 週の礼拝説教

■日 時：2024 年 11 月 3 日（日）10：30～11：30 降誕前第 8 主日礼拝
（召天者記念礼拝）

■説 教： 保科けい子牧師

■聖 書：新約：ローマの信徒への手紙 6 章 15～23 節（新約 P281～282）

■説教題：「行き着くところは、永遠の命です」

■讃美歌：493（いつくしみ深い 共なるイエスは）
385（花彩る春を この友は生きた、）

本日の召天者記念礼拝を多くの皆様方とささげることができることを感謝いたします。この召天者記念礼拝の由来になったのは、実は、先週街中で話題になっていたハロウィンなのです。奏楽者の川谷淑子さんがハロウィンと宗教改革、召天者記念礼拝の関連について分かりやすく説明してくださった文章をご紹介します。「仮装やカボチャで騒ぐハロウィンは、ケルト起源のお祭りだが、カトリック教会は土着の習俗をキリスト教に取り入れるのがうまく、11月1日を『諸聖人の日』とした。ハロウィンという語は、〈聖人の日の前夜〉の意味である。10/31にルターが95か条の提題を貼りだしたのは、重要な祝祭日の前日だから情報が行きわたりやすいと計算したから…という説がある。プロテスタント教会では聖人を特別視しないので、11月第一主日を、死者を記念する日とした。ハロウィンもキリスト教と無縁ではない。」とあります。ルターのこの行動については、先週、私も説教の中でお話いたしましたが、少し繰り返します。当時のローマ・カトリック教会では、11月1日の「諸聖徒日」に聖人たちの遺物を展示し、それらを見るために大勢の人々が教会に集まって来ました。聖人たちの遺物を見るだけでも、ご利益があると考えられていたのです。そして、当時のローマ教皇レオ10世は、ローマのサン・ピエトロ大聖堂の新築のために莫大な資金の調達に迫られていました。そのために、これまでの多くの聖人たちが積んだ功績、言い換えれば徳と呼ばれるものを贖宥状（免罪符とも呼ばれています）という形で売り出しました。それを買えば、たとえ現実の中であまりほめられた生活をしていなくとも、聖人たちの功績に与ることができるので、現世ではご利益があり、死後の世界でも地獄に落ちることがなく救われるということをやりたい文句にして、広く売り出したのです。「お金が箱の中に投げ入れられる音とともに、魂は救われる」と宣伝しながら贖宥状（免罪符）を売り歩いていた当時のカトリック教会の説教者たちの姿は、高校の世界史の教科書の挿絵としても描かれています。そのようなカトリック教会の姿勢に憤り、マルティン・ルターは、「魂の救いは善行にはよらず、キリストの福音を信じることのみによる」という確信から、九十五か条の論題を提示したのです。ルターの宗教改革は、ルーテル教会という形で、主としてドイツから北欧の国々へと広がっていきました。私たちといつも礼拝を共にささげておられるライヤさんの母国のフィンランドもその一つです。そのルターの宗教改革から少し遅れて、フランス人のジャン・カルヴァンがスイスのジュネーブで独自の宗教改革を行いました。その流れは、フランス、イギリスなどにも広まっていき、アメリカにわたり、やがて、日本への伝道へと広がっていったのです。私たちの日本基督教団立川教会は、こちらの流れにあります。いずれにしても、「聖書のみ」「信仰のみ」「恵みのみ」を大切にして、今日まで歩み続けてきました。

ところで、本日の召天者記念礼拝は、立川教会において信仰者として歩み天に召された方々、またこの教会でご葬儀が行われた方々、様々な形で立川教会に連なっておられた方々、今現在立川教会員として連なっておられる方々のご家族や親しい方々などを覚えてこの礼拝を守っています。今朝集われている方々の中には、年に一度、この日だけ

立川教会の礼拝に集われるご遺族がいらっしゃると思います。また、毎週のように礼拝に集われている方々であっても、普段の礼拝とは違う思いで集われている方々がおられると思います。それぞれが、愛する人の在りし日の姿を思い起こされているのではないのでしょうか。わたしたちは誰でもみな、地上での生涯を終える日が来ます。確かに、この世での目に見える交わりは死によって終わります。しかし、私たちにとって愛する人は、たとえ召されてもわたしたちの中で思い出の存在となっていきます。召天者記念礼拝では、そのような思い出となった方々が近く感じられるということがあるのではないかと思います。しかし、わたしたちがこの礼拝に集っていますのは、いわゆる亡くなられた方々を供養するためではありません。信仰をもって地上を生きられた先達は、その信仰によって天にいます神様のもとに召されたのです。ですから、その信仰に倣って私たちも歩む思いを新たにしたいと思います。しかし、皆様方の中には、「わたしの愛する家族はキリスト教など信じていなかった。そのような場合はどうなるのだろうか」と心配になるかもしれませんが、そうではないのです。主イエス・キリストは、ヨハネによる福音書の中で「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。」とお語りになっています。主イエスが、神様のもとに私たちのために住む場所を用意してくださったのです。そのようにして、すべてが整えられているのですから、地上にいる私たちが、亡くなられた方々のために何とかしなければ、と様々に心を騒がせる必要はないのです。そうではなくて、私たちがすでに亡くなられた方々を心から覚え、主なる神様に対して、「どうぞ、あなたの御許で永遠の安らぎを与えられますように、主イエスが共におられて慰めてくださいますように」と祈ることが大切なのです。

そういうわけで、召天者記念礼拝は、もちろん、亡くなられた方々を覚えるためということもありますが、その方々も私たちをも、ご自分のもとへ招いてくださっている神様をしっかりと心に覚えるときなのです。私たちは、神様を礼拝しようという思いを神様から与えられなければ礼拝に来ることはありません。日常の雑事の中で生きてると、神様のことを忘れてしまっていることの方が多いのです。しかし、天にいます神様のもとに召された方々は、いつも神様の御許で、顔と顔を合わせて神様をほめたたえています。私たちが神様を賛美している時、私たちの愛する召された方々も神様の近くで賛美しているのです。この礼拝の最後に讃美歌 29 番「天のみ民を」を歌います。「天のみ民も、地にあるものも、父・子・聖霊なる神をたたえよ、とこしえまでも。アーメン」という歌詞です。歌うたびに、天にいます先に召された方々と、地上にある私たちとが、共に神を賛美している、そのような思いにさせられる讃美歌です。神様が生きる者の神であり、死んだ者の神でもあるからこそ、わたしたちが神様を信じて生きていく限り、愛する人との交わりも、死をも超えてなお続くのです。そのことを、本日の聖書箇所ローマの信徒への手紙 6 章の 22 節後半の御言葉「行き着くところは、永遠の命です。」は語っています。

ローマの信徒への手紙 6 章 15 節から 23 節は、ローマの信徒への手紙の中でも、手紙を書いた使徒パウロが自分自身のかつての歩みと主イエス・キリストによって確かな救いを知らされた後の歩みを、比較しながら語っています。そういうわけで、とても大事な箇所なのですが、非常に難しい箇所でもあるので、本日は深くは触れません。彼の考えは、書き出しの 15 節に打ち出されていると思います。「では、どうなのか。わたしたちは、律法の下ではなく恵みの下に在るのだから、罪を犯してよいということでしょうか。決してそうではない」。「律法の下ではなく恵みの下に在る」というのは、神は私たちの罪を律法に照らし合わせて厳しく裁こうとしておられるのではなくて、それを赦して私たちを救おうとして下さっている、ということです。「恵み」とは罪の赦しの恵み

であって、神が遣わして下さった独り子主イエス・キリストの十字架の死と復活によって、この恵みによる救いが私たちにもたらされ、与えられたのです。それが、パウロが宣べ伝えているキリストの福音、喜ばしい知らせ、救いの知らせなのです。この罪の赦しの恵みの中に置かれているのだから、罪を犯してよいということになるのか、決してそうではない、とパウロは語っているのです。本当に、自分自身が恵みの中に置かれている、ということを知ることができたなら、あなた方は、もう二度とかつての汚れや不法の中に生きていた恥ずかしいと思うような、滅びに至る生活には戻らないだろう、と励ましている箇所である、と私は考えています。そのことこそが、「聖書のみ」「信仰のみ」「恵みのみ」という宗教改革の原理に生かされることでもあると思います。

本日の午後2時から、立川教会では年に一度の墓前礼拝をいたします。その教会墓地の墓碑に刻まれているのは、「そのはては永遠の命なり」という文語訳の聖書のローマの信徒への手紙6章22節の後半の御言葉です。それは、今私たちが読んでいる新共同訳聖書では、「行き着くところは、永遠の命です」という御言葉です。すでに亡くなられた方々も、今もなお生かされている私たちも、行き着くところは「永遠の命」であることを確信してまいりましょう。

※立川教会では、11月17日（日）午後1時から、礼拝堂を会場にして、カンテレ（フィンランドの伝統楽器）の演奏（はざた雅子氏）とそれにまつわるお話（橋本ライヤ姉）の会が開かれます。入場は無料です。どうぞ、どなたでもご出席ください。